

法然上人の本願観の研究

伏 見 誓 寛

凡そ本願というのは因位の誓願、或は宿願とも訳される語であつて、即ち仏及び菩薩が過去に於て發起せる誓願をいう。これに総願と別願とがある。総願とは菩薩たるものと一緒に發起すべき弘誓であり、普通四弘誓願がこれである。別願とは総願の実際化に当り、一々の仏が化益すべき衆生に適する具体的条件を願望されたものであり、それは釈迦の五百の大願、弥陀の四十八願、薬師の十二の大願の如きがそれである。今は弥陀の四十八願の見方について述べてみたいと思う。

この四十八願は娑法身願と娑浄土願と娑衆生願とからなつており、娑法身願は才十二、十三、十七の三願がこれであり、娑浄土願とは才三十一、三十三の二願がこれであり、娑衆生願は他の四十三願がこれである。

新羅浄土教家、即ち法位、玄一、憬興等の諸師は才十

八、十九、二十の三願を特に重要視しているが、彼らの十念は弥勒発問経に説く所の慈等の十念であるとしている。それに対し支那の浄土伝灯曇鸞、道綽、善導等の列祖は、才十八願を特に重要視している。善導は称名念仏を以て往生の業と定め、その理由に乘仏願、託仏願、唯由本願力等と云つて、凡入報土の実を示されたのである。法事讃に、「弘誓多門四十八偏標念仏最為親」と云い、いたるところで弥陀の本願力の強大なることが認められている。

日本に於いて宗祖以前には、智光・良源・源信・静照・永観・珍海等があるが、永観等になると次才に本願における称名念仏が主張されているが、それはいまだ宗祖の様な強烈なものではなく、観念のかたわらに説かれたものと見られている。

さて宗祖の本願観は選択集に述べられている。先づ三部経釈には、

「その四十八願といふは、法蔵比丘、世自在王仏の御まへにして菩提心をおこして、淨仏国土成就衆生の願

をたて給ふ。その四十八願にあるひは無三惡趣ともたて、あるひは不更惡趣ともとき、あるひは悉皆金色とも

いふはみな、才十八の願のためなり」

と云つて、四十八願は悉く才十八願のために誓われたものであることを主張している。若し布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若・菩提心・六念・起立塔像などを往生の行とし、本願としたならば、愚鈍下智の者、貧賤者破戒者などは往生の望を断たねばならない。いかなる者でも往生坐臥に時節の久近を問はず仏の御名を称うれば必ず往生出来るとされたのがこの本願である。

その本願を選択された理由は、選択集に八重選択を挙げてゐる。無量寿経の中に三の選択あり。一に選択本願、二に選択讃歎、三に選択留教なり。觀經に三の選択あり。一に選択專取、二に選択化讚、三に選択付属、次に阿彌陀經に一の選択あり、いわゆる選択証誠般舟三昧經に一の選択あり、所謂選択我名これである。これらはすべて彌陀・釈迦・諸仏の選択であつて、決して人間が選択したものではないのである。これらを更に徹底せしめんが

為に三重選択が説かれている。一に捨聖帰淨、二に捨雜帰正、三に捨助帰正である。

選択集才十六章段に、

「夫欲速離生死二種勝法中且闍聖道門選入淨土門。欲入淨土門正雜二行中且拋諸雜行選應歸正行。欲修於正行正助二業中猶傍於助業選應專正定。正定之業者即是稱仏名。稱名必得生、依仏本願故。」

と称名が本願であり、それによつて往生を得る事を明確に示されている。更に撰択集には「四十八願之中既以念仏往生之願而為本願中之王也」と云い、才十八願を王本願とみて、悉くその中に摂せられてしまふとみるのである。この事は無量寿経下巻の願成就の文、即ち、「諸有衆生聞其名号信心歡喜乃至一念至心廻向願生彼国即得往生住不退転唯除五逆誹謗正法」によつて立証され、更に淨土往生の方法として説かれている三輩往生の文にも、上中下輩とも悉く一向專念無量寿仏と説き、觀經下品下生の文にも、「令声不絶具足十念称南無阿彌陀仏称仏名故於念念中除八十億劫生死之罪」とあり、結論の文章に

も、「汝好持是語持是語者即是持無量壽仏名」とあり、又阿弥陀經にも「執持名号若一日乃至七日」とある事によつても、才十八願の王本願なる事が証明されるのである。

この王本願である念仏は万徳の歸する所である。弥陀一仏のあらゆる四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功德と、相好・光明・說法・利生等の一切の外用の功德が皆悉く阿弥陀仏の名号の中に攝せられている。即ち名号は万徳の所歸、万機普益なのである。

以上の様に法然は善導の觀經疎によつて本願の念仏に遭つたのである。他の仏の本願を見ると、いかなる人、時、処に平等に行ぜられる本願を誓われたものは見られないのである。弥陀においてのみ若くは不生者不取正覺と生因本願を誓われたのである。念仏往生要義抄には、「阿弥陀ほとけの本願は、末代のわれらかためにおこし給へる願なれば、利益いまの時に決定往生すべき也」と云われている様に、善導・法然はこの本願にだけ、極惡の衆生がそのまま永遠の大生命に完全に生かされ得る為の易

行易修の念仏、弥陀の慈悲のふかき、即ち他力の救済確實なることを、見出されたのである。

法然上人に於ける戒と念仏の研究

松 谷 広 照

法然上人以前は、三学による解脱を説いていたのであるが、三学による解脱は我々凡夫には、なし難いものとして、法然上人は三学の他なる道を求められた結果、本願行であり、勝易の行である念仏を得られ、専修念仏を提唱して、仏教実践の根本として重んぜられる戒もまた本願行でないが故に捨てられたのである。しかしまた他面自身戒を遵守され、戒を授けられているのであつて、こゝに問題が起つてくるのである。私はこの問題について、雜行としての戒、助業としての戒、念仏信心確立の戒と、章を設けて考察してみたわけである。

戒は仏教に歸依した者は、皆ことごとく守らなければ